

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 屋良 健一郎

本論文は、古琉球期から近世にかけての琉球と日本との関係を、外交および文化交流の二つの側面から明らかにしようとするものである。外交については従来、薩摩藩と琉球王国との関係を中心に研究が蓄積されてきたが、両者の中間に位置する琉球・薩摩海域の諸勢力、とくに種子島が果たした役割に注目して再検討を試みる。また文化交流についてはそもそも研究が乏しいことから、琉球における日本文化受容の様相を通時的にとらえようとする。

第一部「琉球・薩摩海域の諸相」では、種子島とその領主種子島氏に視点を据えて、琉球と日本との外交の実態を検証する。第一章では、中世の種子島氏は琉球王国と独自の外交・貿易関係を構築し、それを媒介として、薩摩のみならず日本国内の諸勢力と幅広い関係を取り結んでいたことを明らかにし、中世における境界地域の領主の独自性を指摘する。第二章では、種子島氏が薩摩藩の支配下に入った近世においても、種子島氏と琉球との交流が見られることを確認し、その背景として、近世においても種子島は琉球船の重要な寄港地であり、琉球船漂着時には種子島氏によって保護が加えられていたことを重視する。さらに第三章では、中国船の種子島漂着時と琉球船漂着時での処遇の違いを検討し、いずれも近世日本にとっては異国と位置づけられながらも、中国とは異なる琉球独特の性格を浮かび上がらせる。

第二部「琉球・日本の文化交流」では、琉球において日本文化がどのように受容され、琉球の人々によって内在化されていったかを検討する。第一章では琉球王国発給の国内文書である辞令書に注目し、その様式変化を文書様式の日本化ととらえ、琉球国内における日本式書札の習得や文書作成組織の整備を指摘する。第二章では琉球における和歌受容のあり方をあとづけ、日本文化の正統を受容することを誇りとする琉球士族の自己認識を導き出す。第三章では、中国化が進んだとされる十八世紀の琉球においても日本文化が奨励され、さらに琉球士族の嗜みとして日本文化が浸透したことにより、琉球独自の文化が形成された可能性を指摘する。

以上のように、古琉球期から近世にかけて境界領域が外交関係に果たした役割を具体的に明らかにしたことが、本論文の成果として特筆される。また文章表記や和歌表現のレベルにまでふみこんで日本文化受容のあり方を検討し、そこから琉球士族の意識を読みとったことは、琉球と日本の文化交流研究を新たな次元に引き上げる成果と評価することができる。外交と文化交流の双方を貫く琉日関係の特質、琉球文化形成における俳諧の影響や中国文化との関係など、なお取り組むべき課題が残されてはいるが、総じて本論文が、当該分野において今後参照されるべき独創的な成果であることは揺るがない。

以上により、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績と判断した。